

公共施設のあり方を考える

私たちの身近に存在する「公共施設」。市役所をはじめ、集会所や学校など私たちの生活に深く関わっているものが数多くあります。しかし、この公共施設に大きな問題が忍び寄っています。それが「公共施設の更新問題」。老朽化、耐震性の低下、維持管理費の増加など施設ごとに抱える問題はさまざまありますが、近い将来、これらの多くの施設に改修や建て替えが必要になります。それには莫大な費用がかかり、私たちの未来に大きな影響を及ぼそうとしています。今月はこの問題を考えていきたいと思えます。

公共施設を巡る情勢

好景気が生んだ副産物

昭和40年〜50年代、高度経済成長に沸いた日本。景気の上昇に伴って、私たちの生活は豊かになりました。人口は増加し、それに伴う道路や水道などのインフラの整備が進むと同時に、ハコモノと呼ばれる公共施設も次々と建設されました。

全国的に抱えている課題

あれから半世紀を経て、人口減少社会を迎えた日本。今後ますます人口が減ると予測されるなか、税収の落ち込みに加え、公共施設の老朽化に伴う修繕経費の増加が重なるなど、自治体にかかる財政への負担が懸念されます。また、市町村合併によって同様の施設を複数抱える自治体にとっては、より大きな財政的な不安要素を抱えている状況にあります。

迫られる選択

公共施設は一刻と老朽化していません。耐用年数を超えているものや、耐震性が低下している施設もあり、すでに修繕・建て替えが必要なものもあります。使い続けていくのか、更新しないのか。全国の自治体でその選択が迫られています。

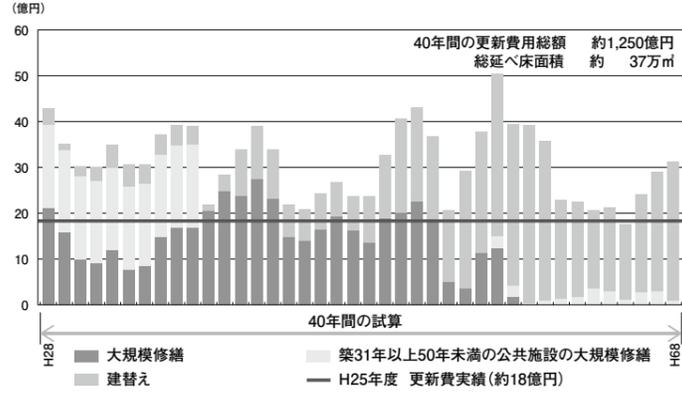
庄原市の公共施設事情

類似規模自治体で全国1位

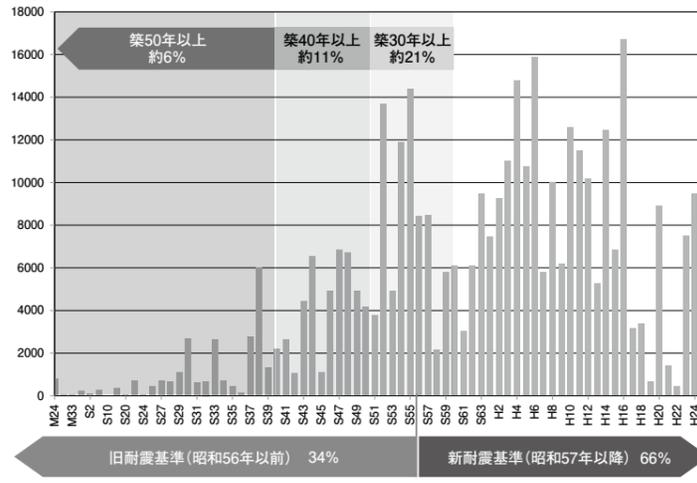
では、庄原市の現状はどうか。市の保有する公共施設は、市役所庁舎や小中学校といった大規模なものから、小規模な集会所やトイレ、自転車置き場などあわせて約600施設あります。総延べ床面積は約37万㎡(平成25年度末)。マツダスタジアム約7個分に相当します。平成24年に東洋大学PPP研究センターが全国981自治

体を調査したところ、庄原市の住民一人当たりの公共施設の延べ床面積は8.98㎡。この調査のうち、人口規模が庄原市と同程度の都市をみると平均4.97㎡で、庄原市の8.98㎡はダントツの1位という結果でした。平成17年に7市町が合併し、広大な面積となったことなどを考えると単純に比較できない一面もありますが、全国平均の2倍以上の面積を有している事実を受け止めておく必要があります。

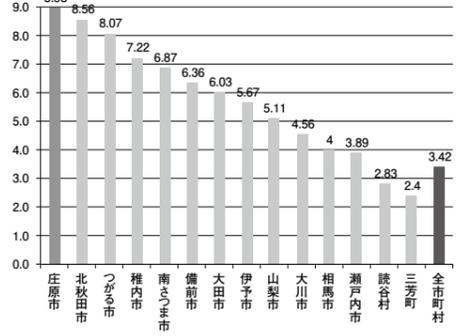
●庄原市の公共施設の将来の更新費用の推計



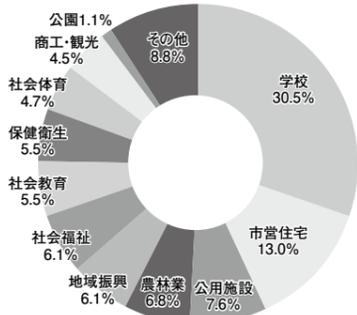
●庄原市の公共施設の築年別整備状況



●1人当たり公共施設延床面積 類似規模自治体との比較(人口37,500~40,000人)



●庄原市公共施設分類別延床面積割合



学校…小中学校、給食調理場など
公用施設…市役所庁舎、消防格納庫など
農林業…ゆめさくら、遊YOUさろん東城、堆肥センターなど
地域振興…自治振興センター、自治会館など
社会福祉…デイホーム、デイサービスセンター、保育所、子育て支援センター、ふれあいセンターなど
社会教育…市民会館、図書館、博物館など
保健衛生…保健福祉センター、診療所、リサイクルプラザなど
社会体育…体育館、スポーツ広場など
商工観光…道の駅、道後山くろカンパークなど

更新費用に毎年約31億円

仮に、現在保有する公共施設を全て更新すると、今後40年間に必要な更新費用の総額は約1,250億円。毎年約31億円が必要になります。これは、平成25年度に公共施設にかけてきた投資的経費(改修、建て替えなどの経費)約18億円の1.7倍。本市の

本年度予算の一般会計総額が311億8441万円です。で、その1割に相当します。今後、公共施設の老朽化が進行し、20年後には、その約40%が築50年以上となることから、大規模改修、建て替えなどに莫大な費用がかかることは明らかで、私たちの子や孫の世代に大きな負担を強い

公共施設の有効活用の事例紹介

●秦野市（神奈川県）

庁舎敷地を活用した コンビニエンスストアの誘致

近隣の公共施設の移転に伴い余裕ができた庁舎駐車場を有効活用し、コンビニエンスストアを誘致。土地賃貸料収入を得るとともに、24時間年中無休の公的サービス（市刊行物の販売、図書館貸出本の返却受付、住民票の受け渡しなど）を提供。市有建物を使用しないコンビニエンスストアを庁舎敷地内に誘致したのは、全国で初めて。



保健福祉センターに郵便局を誘致し 証明書交付業務を実施

余裕のある保健福祉センター1階ロビーを有効活用し、郵便局を誘致。「地方公共団体の特定の事務の郵便局における取扱いに関する法律」に基づき、住民票などの証明書交付業務を委託。建物賃貸料収入を得るとともに、公務員を雇用しないで公共サービスのネットワークの充実と拡大を図っている。



県立広島大学環境科学科 教授

西村和之さん

プロフィール

にしむら・かずゆき。兵庫県神戸市出身。昭和35年生まれ。昭和59年麻布大学環境保健学部卒業。平成3年国立公衆衛生院研究課程修了。Doctor of Public Health（国立公衆衛生院）博士（工学）（東北大学）。平成3年国立公衆衛生院流動研究員。平成6年東北大学助手。平成8年新日本気象海洋（株）研究員。平成9年豊橋技術科学大学助教授。平成13年（独）国立環境研究所主任研究員。平成17年から現職。庄原市在住。

求められるものは何か

公共施設は市民の財産です。どの施設も必要とされ建てられたものです。

しかし、人口の減少に加え、社会情勢やライフスタイルの変化などによって、ニーズに対応できていない施設もあり、十分に活用されていない現状があります。これまで利用されることを前提として設置された公共施設のあり方を見直すときが来ていると言えます。

そこで求められるものとは何でしょうか。

公共施設には、水道やごみ処理、道路や橋といった私たちが生活する上で確実に必要な施設と、より文化的で健全な生活を送るために必要な施設とに大きく分かれます。

学校や公民館のようなものは後者で、絶対にこれがないと生きていけないというものではないかもしれませんが、だからと言って整理しましょうという議論にはなりません。必要であるインフラの経費も抑制していく必要があるゆえに、そうした施設も抑制していきま

しょうとなります。人口が減り、税収が落ち込み、維持経費が膨らむ中で、手をつけないといけない状況にあることは間違いありません。

そうすると、何を残して何を捨てていくのか。何も捨てないという選択は、将来世代の人に大きな負担をかぶせることになります。次世代に何を残していくのか、そのためにわれわれの世代でどこまで我慢するのか。これは私たちの今の生き方が問われています。捨てるかと判断しても、単に取

り壊すのではなく、地域の歴史として、何らかの形で残して行けるのではないのでしょうか。当然残すべき施設は残していく必要があり、まず、自分たちが生きていく上で譲れないものもあると思います。現在と人口規模が同じ1960年代の人々の営みを振り返ると何かヒントがあるかもしれません。

庄原市の将来のために、市民全体でこうした議論がもっと増えることが必要だと思っています。

次世代に何をどう残していくのか— 我々の生き方が問われています

どういった地域づくりを行うのかという議論が、まず必要だと思います

公共施設は地域の拠点になっているものもあり、自治振興区でも考えなくてはならない問題だと思います。ただ、「それが必要か必要でないか」という議論よりも、「地域づくりをいかにしていくのか」という議論がまず必要だと思います。

例えば数信地域では、地域振興計画の中で地域ブランド作りを盛り込んでいますが、そのためには農産物を加工する作業所がほしいという声が上がっています。そこで、公共施設ではありませんが、JA所有の加工所が使われていないため、そこを活用させていただこうと協議を進めています。

こうした情報を自治振興区と行政が共有する中で、横断的に協力し、地域づくりを進めていけば無駄も減り、公共施設の利活

用のアイデアも生まれるかもしれません。地元で活用が難しいのであれば、企業や事業所などに紹介して活用法を検討してもらうことも有効かもしれません。

一方で、早くあきらめるということも必要だと思います。「もったいない」「何かに使える」と思っても、一定のルールを決めたら思い切って整理していくことも必要。ほとんど利用がない施設でも、例えば浄化槽があれば、管理費や法定検査料といった経費がかかり続けるわけで、民間会社ではありえない。そうした経営感覚も必要だと思います。

ただし、何でも縮小するのではなく、必要に応じて新しい施設の設置も検討していく必要もあると思います。



庄原市自治振興区連合会 会長
藤谷善久さん



手島亜希さん
(総領町)

総領町の旧黒目小学校を改築し、カフェを営んでいる手島亜希さん。今年3月19日に旧田川小学校（濁川町）で開催された、学校備品を販売するイベント「廃校ノスタルジアin庄原」を主催した実行委員会のメンバーでもあります。

このイベントを通じて感じた思いを聞きました。

準備に3カ月、整理しなければいけない備品が多く、ものすごく大変でしたが、その間、普段交わりのない学生や市役所の人たちと一緒に取り組んだことで、皆さんの庄原に対する強い思いを感じ、より一層庄原が好きになりました。一緒に行っていた子どもたちも、作業を手伝ったり、理科の実験道具を試してみたり、体育館で自由に遊べるので毎週楽しみにしていました。「庄原ではこういう遊び方もできるんだ」と魅力に感じました。

また、ボランティアの方や友人との交流の輪が広がりましたし、何より地元の人と触れ合え、学校に対する思いを聞かせていただけました。聞かなくても大きく、このイベントに対する思いも新たにすることができました。

イベント当日は多くの人にお越しいただき、地域に元気をお届けできたと思います。今回のように地元の方と一緒に取り組むことで、他の地域でも活性化が期待できるのではないのでしょうか。「こんな使い方もできるんだ」と気づくことで、新たな活用のヒントが見えてくるかもしれませんね。

右：備品のオークション会場となった体育館／右下：地元の皆さんによるバザーも盛況／下：イベントを成功させた実行委員の皆さん



